

## 令和6年度 病虫害発生予察 特殊報 第1号

病虫害名： トマトキバガ *Tuta absoluta* (Meyrick)

対 象： ー\*

(\*誘殺された成虫が確認されたが、現時点では農作物の被害は確認されていない)

### 1 病虫害情報の内容

トマトキバガの誘殺を、東京都多摩地域において初めて確認した。

### 2 誘殺経過

- (1) 令和6年9月30日に、東京都病虫害防除所が都内多摩地域に設置したトマトキバガの侵入調査用フェロモントラップにおいて、疑義成虫3頭の誘殺が確認された(図1)。農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼した結果、いずれも都内では未発生のトマトキバガと判明した。現在のところ、都内では本種による農作物の被害は確認されていない。
- (2) 本種は南米原産であり、海外ではヨーロッパ、アフリカ、中央アメリカ、中東、アジアに分布を拡大している。国内では令和3年に熊本県で初めて確認され、これまでに43道府県で誘殺あるいは農作物への被害が確認されている。

### 3 形態

成虫は翅を閉じた状態で体長5～7mm(前翅長約5mm、開張約10mm)。前翅は灰褐色の地色に黒色斑が散在し、後翅は一様に淡黒褐色である(図2)。

終齢幼虫は体長約8mm、体色は淡緑色～淡赤色で、頭部は淡褐色である。前胸の背面後方に細い黒色横帯がある(図3)。

### 4 生態

1年に複数の世代が発生し、繁殖力が高い。地域によって差はあるが、年に10～12世代発生する地域もある。卵～成虫になるまでの期間は24～38日程度であり、気温が低い時期はさらに延びる。成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。

### 5 被害

トマトでは茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害するため、食害部分は表面のみを残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる(図4)。果実では、幼虫がせん孔侵入して食害するため、果実表面に数mm程度のせん孔痕が生じるとともに食害部分が腐敗する。

寄主植物はトマト、ナス、ピーマン、パレイショ等のナス科植物のほか、マメ科のインゲンマメも寄主植物として報告されている。

## 6 防除対策

- (1) トマトまたはミニトマトでは、トマトキバガに登録のある薬剤を使用する。なお、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統（作用機構分類コード）が異なる薬剤でローテーション散布を行う。
- (2) 被害葉および被害果はほ場に放置せず、土中に深く埋めるか、ビニール袋等に入れて密封することで、寄生した成幼虫を死滅させたうえで、適切に処分する。

## 7 参考文献

- (1) 特殊報：神奈川県、千葉県、長野県など
- (2) 農林水産省横浜植物防疫所（2022）トマトキバガについて．植物防疫所病虫害情報 127：1-3



図1 フェロモントラップ誘殺個体



図2 トマトキバガ成虫

(原図：農林水産省植物防疫所)



図3 トマトキバガ終齢幼虫

(原図：農林水産省植物防疫所)



図4 トマト果実および葉の被害

(原図：農林水産省植物防疫所)

## 令和 6 年度 病虫害発生予察 特殊報 第 2 号

病虫害名： チュウゴクアミガサハゴロモ

*Ricania shantungensis* (Chou & Lu, 1977)

対 象： チャ

植木類（ツツジ、ドウダンツツジ、ツバキ、ハナミズキ、モミジなど）

果樹類（カキ、キウイフルーツ、ブルーベリーなど）

### 1 病虫害情報の内容

チュウゴクアミガサハゴロモの発生と被害を、東京都多摩地域において確認した。

### 2 発生経過

- (1) 令和 6 年 10 月に、チャおよび植木類、果樹類の圃場でチュウゴクアミガサハゴロモ成虫の寄生および産卵痕を確認した。
- (2) 本種は中国原産であり、海外では韓国、トルコ、フランス、ドイツ、イタリアに分布が拡大している。国内では平成 29 年に大阪で初めて確認されて以降、本州、四国および九州で発生が報告されている。作物への被害については神奈川県、埼玉県、山梨県、福岡県で特殊報が発表されている。

### 3 形態

成虫の体長は 14～15mm、前翅長 14mm 程度。茶褐色から鉄さび色の前翅の前縁中央部に扁平で半円形の白斑がある（図 1、2）。

幼虫は白色で、腹部から白い糸状の蠟物質の毛束を広げる（図 3）。

卵塊は樹木などの枝に産み付けられ、産卵痕は白色の蠟物質で被覆される（図 4）。

### 4 生態

本種は広食性であり、カキノキ科、カバノキ科、クワ科、ツツジ科、ツバキ科、ニシキギ科、バラ科、ヒノキ科、フトモモ科、ブナ科、マメ科、ミカン科、ミズキ科、モクセイ科、モチノキ科等の多くの樹木類およびキク科草本植物で寄生が確認されている。

### 5 被害

産卵の際に枝を傷つけるため、枝の枯死や樹勢の低下が生じることがある。また、産卵痕は白色の蠟物質で覆われるため植木類では景観を損ねる。

成虫および幼虫は枝に寄生し、吸汁する。発生が著しいと排泄物によりすす病が発生する。

## 6 防除対策

- (1) 令和7年1月現在、本種を対象とした登録農薬はない。
- (2) 産卵された枝を除去し、適切に処分するなど、耕種的防除に努める。

## 7 参考文献

- (1) 神奈川県特殊報、埼玉県特殊報、福岡県特殊報、山梨県特殊報、石川県防除室だより
- (2) 外村俊輔・大原賢二. 2024. チュウゴクアミガサハゴロモ *Ricania shantungensis* (Chou & Lu, 1977) の徳島県からの初記録. 徳島県立博物館研究報告 34: 77-80



図1 ナシ葉上の成虫  
(東京都農林総合研究センター提供)



図2 粘着版に捕獲された成虫



図3 ツバキ枝上の幼虫  
(東京都農林総合研究センター提供)



図4 枝上の産卵痕  
(左：ブルーベリー、右：ツバキ)